

〔朝鮮の美術〕展によせて

三国～高麗時代の荘厳具

仏教が朝鮮半島に三国時代に伝えた後、統一新羅を経て高麗時代にかけて仏教は盛行し、金銅仏や高麗仏画などが残されています。仏画に関する研究では、王族や有力者、僧侶などによる発願といった制作背景に伴う絵画様式の違いについても論考が進められてきました。これらの仏画とともに朝鮮半島における仏教のあり方を考える上で重要な現存作例に、舍利容器や仏龕、香炉などの仏教工芸品が挙げられます。仏像や舍利といった信仰対象のものではありませんが、これらを守護し、荘厳するために、仏具は技術を駆使して美しく厳かに装飾されており、ここでは本展覧会の展示作品を中心に、これらの概要を見ていきます。

〔舍利容器〕仏塔は釈迦涅槃の後にその骨である仏舍利を塔に納めて供養したことに始まり、インドから西域を経て中国、朝鮮半島、日本などへ伝播しました。『摩訶摩耶經』(大正蔵No.383)や『大般涅槃經』(大正蔵No.7)には涅槃後に釈迦の身体を金、銀、銅、鉄の四重の棺に入れて荼毘にふしたと記され、通常、舍利は幾重もの容器の中に籠められ、厳重に守護されています。このような舍利容器には塔形、棺形など多様な形があります。特に朝鮮半島の統一新羅時代には、当時の高い金工技術を反映させた複雑で華麗な装飾が施された舍利容器が作られています。

前述のように舍利は幾重もの容器の中に納められるため、舍利を直接入れる容器も、その外容器も舍利容器ですが、舍利を直接入れる容器はガラス製や水晶製が多く、ここではそれらを納める金属製容器を対象とす

ると、朝鮮半島の舍利容器には箱形、壺形、舍利殿形、仏塔形などが見られます。

近年では、2009年に全羅北道益山市の弥勒寺(百済7世紀前半に創建)址石塔から舍利奉安記(639年銘)と舍利荘厳具が発見されています。その中に壺形の金製舍利容器があり、蓮弁文や唐草文が力強く精緻に刻まれ、魚々子が均等に蒔かれています(図1)。統一新羅時代の代表として知られる感恩寺址東三層石塔から発見された金銅舍利容器(682年)は舍利殿形で、四天王が取り付けられた外函が付き、四柱が天蓋を支える吹き抜け式の舍利殿を模して、基台中央に舍利が置かれます。天蓋には透かし彫りによる如来坐像や唐草文様によって荘厳されています。

〔金銅製舍利容器〕(★図2、統一新羅時代、個人蔵。※★は特別出陳作品、以下同)は一括として伝わりますが、鑄造による箱形容器と、金銅板を用いた六角塔形舍利容器があり、後者には内部にガラス製舍利瓶が納められていたと見られます。どちらも文様を刻む線は大らかで、後者の各側面には菩薩立像と植物文が刻まれ、余白に魚々子がまばらに蒔かれます。

また〔銀製層塔形舍利容器及金製内容器〕(★図3、高麗時代、奈良国立博物館蔵)は堂を象った金製の小型容器が銀製の塔内に納められます。三層塔は銀を鍛造した板を蠟付けし、各層の一面にのみ尊像が刻まれます(一層より天部立像、如来坐像、二重円光を伴う坐像)。統一新羅時代から見られる石塔の型式を模しており、階段状の軒下や屋根の縁がわずかに反り上がる様子まで細かく表

現されています。屋根の頂部の相輪が球形を連ねた形式から高麗時代と推定されており、前時代までの煌びやかで複雑な造形とは異なっています。

〔仏龕〕仏像を安置する仏龕は、設置場所や目的により大きさや形状も異なります。北宋の徐兢が高麗を訪れて記した『宣和奉使高麗図経』第二十三巻風俗二の施水の項(今西龍校訂本、1932年)には、高麗時代に仏像を安置した状況がうかがえる、興味深い一節が記されています(訳文は朴尚得・徐兢・高麗図経・国書刊行会、1995年から引用)。

「王城長廊每十間。張帘幕設仏像。置大瓮貯白米。漿復有杯杓之属。恣往來之人飲之。無問貴賤。而以僧徒主其事。」(王城の長廊では、十間・十八メートルごとに帳や幕を張り、仏像を設けている。大甕を置き、白米を貯えている。飲み物にはまた盃、柄杓の類が付いている。往來する人が恣にそれを飲む。貴賤は問わない。僧徒にそれを掌らせている。)

〔張帘幕設仏像〕は帳や幕を張った一種の仏龕と考えることができ、仏像の素材は不明ですが、恐らく、寺院に安置される大規模な仏像ではなく、小規模の仏像を安置する設備があったのではないのでしょうか。この他、個人が携帯したと考えられる高麗時代の小型仏龕が現存しています(『美のたより』No.169研究ノート参照)。

〔金銅仏龕〕(★図4、高39.5cm、高麗時代、個人蔵)は〔金銅仏龕〕(図5、高43.3cm、麗末鮮初、全羅南道・泉隱寺蔵)より一回り小さいものの仏殿を象ったほぼ同形の仏龕で、扉内側及び内部壁面には力強い金剛神や毘盧遮那仏など同じ尊像が打ち出してあらわされています。泉隱寺蔵品では金銅仏が安置され、本来の姿を見ることができます。このような仏龕は貴族の邸宅内で礼拝用に用いられた

とも考えられていますが、石塔に納められた例として、京畿道南楊州市・水鐘寺五層石塔の金銅仏龕(図6、高16.0、1493年、韓国国立中央博物館蔵)があります。やはり金銅仏3体(釈迦如来像、半跏思惟像、地藏菩薩像)が安置され、また発願記を伴っています。仏龕内壁に低く打ち出された尊像は肉感の描写が乏しく、おとなしい表現になっています。

このように、舍利や仏像を荘厳することは功德であり、篤い信仰心を示す手段でもありました。これらの造形は、人々の信仰のあり方を伝えるものであり、また当時の美意識を感じさせてくれます。

(図1は『KOREANA』vol.16, no. 3、2009年、韓国国際交流財団、図5は『佛』2007年3月、仏教中央博物館(韓)、図6は『佛舍利荘嚴』1991年7月、国立中央博物館(韓)より転載させていただきました。瀧朝子)

★図4



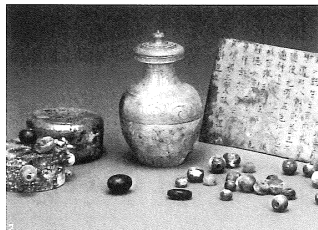
図5



図6



図1



★図2



★図3

